

移住開拓島の無人島化

—移住開拓島の民俗学ノート(三)—

野 地 恒 有

一、開拓地の風景—竹林とタケニグサ

柳田国男は「野草雑記」において、柳田の住んだ喜多見という東京郊外の住宅地の風景の移り変わりをタケニグサ（和名タケニグサ）という草木の盛衰からとらえた。そこで、柳田は次のように書いている。

造成後の新興住宅地の新築の家では「一度はこの草におびやかされて、いかにも文化住宅の浅はかさを、思い知らされずにはすまぬような時期」がある。タケニグサの群生は「土を掘り返して日の光が一面に当り、静かに進み寄る小草のまだ乏しい間には、たとえば植民地の最初の自然移民などのように、ここにしばらくの盛りを息づくのである。」しかし、やがてタケニグサの「目の覚めるような美しさを見せた西隣の空地は、ほどなく土が古びて再び芒に占領せられ、今年はいよいよ隣組が開

墾して大根を播いてしまった。」(柳田 一九九〇a)

新興住宅地に群生する植物の移り変わりにおいてタケニグサ時代ともいう時期がある。「野草雑記」は新興住宅地の歴史をタケニグサの盛衰からとらえた開拓地の風景論である(写真1)。

筆者が育った新興住宅地でも、一九七〇年代、タケニグサ時代からスキ時代の変遷を造成された赤土の土手で目にした。背が高く赤茶色をしたタケニグサの茎を折るとそこから出てくるオレンジ色の樹液を子供たちは毒だと言って嫌っていた。新たに造成された空き地に群生するタケニグサは新興住宅地や開拓地に共通する風景であったのであろう。

写真2は、一九五〇年代後半、一時的移動生活により開拓された愛媛県松山市の由利島における写真である。開拓者の納屋のそばに写っている背の高い植物はタケニグサではないだろうか。



写真1 タケニグサ (名古屋市熱田区の新堀川沿い・2011年)



写真2 開拓者の納屋とタケニグサ [1950年代後半] (宮本 1986 : 268)

そして、「野草雜記」の中で柳田はタケニグサの地方名をあげながら、その命名の由来を「茶色の細長い花莖を附けた」タケニグサの外貌が竹に似ていたからとして、タケニグサと竹の外貌の相似に求めて、次のように述べている。

「嫌われるタケニグサではあるが、その成長過程の一時期には）美しく見える日が二日か三日はあつて、それが最も竹らしく感じられるときでも」あり、そのときのタケニグサの「梢が伸びきつてことごとく茶色の細長い花莖を附けたところは、山の野生の小竹林を思わせる。竹にもややこれと似た色彩を見せる季節があるような気がする」（柳田 一九九〇a）。

さて、ここで私は、タケニグサ命名の由来について外貌が竹と似ている点とは別の点から推測してみたい。

私は、香川県丸亀市の小手島（土地の人は小手島を「オアシマ」と言っている）に向かうフェリーの中で、小手島を眺めながら小手島の人が話している次のような会話を聞いた。

「竹は強い。島の竹やぶのところはもと畑だった。あそこの竹林にはオダイシさんに登る道があつた、その道が竹林になつている。」

小手島では、屋敷や畑の後が放置されて、そこがマダケやモウソウダケの竹やぶになつてきている。小手島では近年、竹やぶが増えてきているという。開拓地や開墾地は放置すると竹や

ぶになる。（写真3）（写真4）

開墾された跡の土地が放置されると竹林に覆われる過程とその結果の姿が、開墾のように土が起こされた跡にタケニグサの林になる過程とその結果の姿に似ているのではないだろうか。柳田も「普請で土を動かした部分」は「そこばかりは堂々としたタケニグサの林」となっていたことを観察しているが、このプロセスと、放置された畑地や宅地跡が竹林になつていくプロセスが似ているのである。

土を起こした跡の更地にはタケニグサの林ができる。放置された畑地や宅地の跡には竹林ができる。タケニグサという名は、タケニグサと竹の外見が似ているというだけでなく（これも関連する要因の一つであろうけれども、ただ外見だけでなく）、開拓や開墾の過程において更地の次の段階にタケニグサや竹の群落があらわれる遷移の過程が同じであるという経験的な知識にもとづいて命名されたのではないだろうか。タケニグサという名は、開墾地や開拓地の風景の一コマをあらわした言葉なのである。

二、無人島化した移住開拓島資料

瀬戸内海域において移住開拓島が形成されている一方で、その多くが無人島化している。そこで、無人島化した移住開拓島の例をあげて今後の研究資料とするとともに、若干のコメント

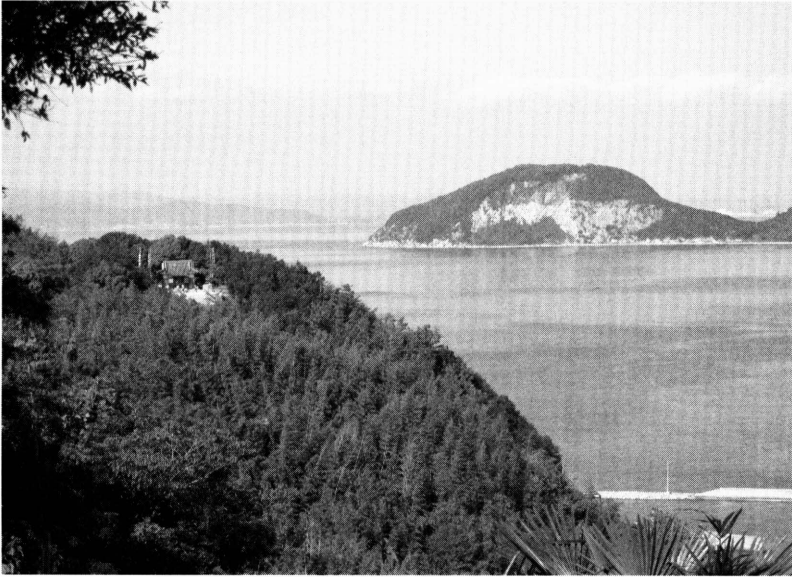


写真3 小手島の竹林（2012年）



写真4 小手島の廃屋と竹林（2012年）

を付する。

無人島化は過疎化ではない。無人島化とは定住化の対立語であり、移住開拓島における定住生活の途絶のことを指している。過疎化とは、完成し持続した定住生活の状態からの衰退のことである。無人島化とは定住化に至らずに終わったこと、移住後の定住生活の形成過程における途絶のことである。

(1) 股島〔香川県観音寺市〕

【資料1】(アチック・ミュージアム 一九七三)

【概要】一八九七年頃に伊吹島から移住。戸数七。移住前にもこの島に作り小屋があり、耕しに来ていた。一九三七年現在の畑の面積は四町足らず。

【生活】島には学校がないので、学童は伊吹島の親戚に預けられて、そこから通っている。

島に住んで一番不便なことは郵便回数が少ないことで、一ヶ月に二回しか配達されない。

盆正月には伊吹島に帰っている。

井戸形の天水溜が三つある。海岸に明神祠が祀つてある。六月二〇日が明神祭である。

〔漁業〕

地引き網だけをやっていたが、一九三二年頃に巾着網が入った。巾着網の網主が三人いる。この網主は地引き網もおこなっている。巾着網の構成員は加工人も加えると一網七〇人必要

とするので、盆前の約三〇日間と盆後の一〇日間にはよそから働きに来る者が多く、非常な活気を呈する。島の娘はイリコを作る。

マス網がおこなわれている。

*股島に関する基本的な聞き取り資料(第一次資料)。これは、一九三七年に渋沢敬三を中心としたアチックミュージアムにより実施された瀬戸内海島嶼巡訪調査。この調査は、一九三七年五月一五日から二〇日の六日間に、瀬戸内海中部の二六の島と五つの海浜を船で巡航しながらおこなわれた(河岡 一九七三)。この調査資料は、一九四〇年九月に「瀬戸内海島嶼巡訪日記」として刊行された。

次の【資料2】や【資料3】にあげる文献で一八〇〇年代末から一九〇〇年代初頭の状況として書かれているのは、引用文献の記載はないけれども、「瀬戸内海島嶼巡訪日記」からの引用あるいは再引用である。

【資料1】の中のマス網とは定置網のことであり、大正一〇年頃に広島県福山市の走島から漁師が来て始めたのが、伊吹島の始まりである(武田 一九九一)。また、明神祠については、「旧暦六月二二日に、エビスさんを船に乗せて、伊吹島を一周して、股島のエビスさんまで足を伸ばす」とある(観音寺市誌増補改訂版編集委員会 一九八六)。

【資料2】(観音寺市誌増補改訂版編集委員会 一九八六)

一八五八年(安政五)の検地帳(八幡神社蔵)には股島分として四反一畝一八歩と記されており、この頃に股島は拓かれたのである。

一九八六年現在、股島は、高屋町の森川繁之氏所有地(畑)一町九反六畝五歩(島の四三・八%)、その他私有地(宅地・畑)九反二畝二八歩、伊吹島所有地(山林)一町五反八畝二六歩、計四町四反七畝二九歩となっている。

股島港は一九三九年に竣工した、第一種漁港(一九五二年指定)。

一九六五年頃、最期に残った川端家も生活の本拠を伊吹島に移し、漁期を含めて半年ほどは老夫婦が股島で暮らしていたが、それも一九七五年頃に無人島となった。

【資料3】(伊吹島民俗資料館運営委員会 二〇〇四)

一九六五年頃、川端福松夫婦(マッセ)が生活の本拠を伊吹島に移した。漁期を含めて半年は股島で暮らしていたが、一九七五年頃に無人島となる。

股島にエビス、金比羅社を祀る。港祭りには上陸してお参りする。

*【資料3】文献「股島の今昔」は、【資料2】文献「観音寺市誌通史編」を(間接的には【資料1】文献も)もとにして

いるが、文中の傍点の部分が加筆された新情報である。

この川端さんについては、股島で網元をして巾着網でイワシをとってイリコにしていたが、そのおじいさんはもうなくなつたという。股島に住んでいた人の子ども(現在五〇歳ぐらいの人)が伊吹島で定置網をおこなっているという(筆者調査)。

(2) 大黒神島(広島県江田島市)

【資料4】(沖美町郷土史編集委員会 一九八九)

広島県江田島市沖美町。天保の大飢饉の頃(一九世紀初め)から新しい農耕地を求めて能美島から移住する者が多くなり、白瀬川を境として西側が畑村(沖美町)、東側が岡大王村(沖美町)の所屬となった。大正中期頃からは農耕船で通いながらの農業が主であった。田植え時期になると小舟に牛馬を乗せて島に渡り田ごしらえをした。最盛期には水田一三町五反、畑一二町六反であった。現在ではまったくの荒れ放題である。

黒神島の最大の資源は木材であり、島の大部分が村有林となっている。島の村有林は江戸時代以来村の財政や村民の暮らしを潤す上で大いに役立った。木材のほか、ヨイチベエと呼ばれるシダも焚き物として販売された。島の花崗岩も採石されてきた。一九八九年現在は島に三方所の採石場があり、町内の三業者が町と契約して採掘している。

*この大黒神島の神社は、鎌倉時代の「安芸国神名帳」に記載

の「黒神明神」にあたるという（沖美町郷土史編集委員会 一九八九）。柳田は「譚海」巻六に「安芸の厳島の別島に黒髪ママ」という所あり。そのかみ明神のまませし所にて、今に社頭鳥居など残りてあり。この島に犬なし。犬の吠ゆる声を憎ませたまうゆえといえり」という記載から、黒神島を犬を上陸させてはならないという戒めのある島の一つとしてあげている（柳田 一九九〇b）。

島へ犬を連れて行つてはならないという禁忌について、柳田は、その本源的な理由は島が葬地だったからと推測した（柳田 一九九〇b）。それに対して、私は犬を連れて行くというのは定住と土地占有を表明する行為であったため、島に犬を連れて行つてはいけなかったのだらうと推測した。たとえば、新島の共有地であった式根島にもそのような禁忌があったが、共有地であったので犬を連れて行くことは島の土地の占有、あるいは移住定着の意思の表明であったので、むやみに犬を共有地である無人島へ連れて行つてはならなかったのであらうとした（野地 二〇一一）。この犬を連れて行つてはならないという禁忌があった大黒神島も、やはり共有地であったことがわかる。

（3）横島〔広島県呉市〕

【資料5】（宮本 一九六八）

倉橋島の村有地であり、本浦の草刈り場であった。一九〇二

年に植林をして村の基本財産とした。一九〇〇年代初頭にはこれを売り五〇〇〇円を得て村役場を建てた。一九四五年に倉橋島南岸の者四〇人が移住した。しかし、船着き場がない、開拓組合長の借入金を使い込み、小学校の火災などにより、一九五九年頃には一〇戸くらいとなった。島を去った者の土地を倉橋島の者が買い、ミカンなどを植えて、本日から出作りに来る者もあつた。小学校も再建されたが、無人島となった。

（4）小柱島〔山口県岩国市〕

【資料6】（宮本 一九六八）

戦後何人かの人が渡つて開拓したが、やがて、彼らは開墾地を捨てた。

（5）由利島〔愛媛県松山市〕

【資料7】（宮本 一九六八）

〔困窮島〕二神島の「困窮島」（*村の救済制度として困窮した人が生活再建をするために用意されたとされる島のこと）であった。二神島で生活に困った人が老人や子どもは二上島に残して、夫婦で由利島に来て畑を作って稼いだ。そこで一〇年も農業をすれば借金を払って貯蓄もできて財産がたて直つてくと二上島に帰った。由利島にいる間も盆や正月には帰った。由利島の畑にミカンを植えて、二上島に帰った後も通い耕作をおこなう者ができた。「困窮島」の制度はこのようにして消えてい

った。

〔イワシの出稼ぎ漁〕 由利島にはイワシの漁期になると、二上島から網船が出稼ぎに来て漁期中滞在した。イワシ網を引くには男が四〇人ほど必要とし、同時に、イワシをイリコに製造するために女も四〇人ほど必要とした。そこで多くの場合夫婦で出稼ぎに来た。未婚の男性も由利島に来ることが認められていたが、その場合、若い娘を連れてこなければならなかった。仲のよい娘を誘ってきて、ほとんど結婚したという。(写真5)

* 「困窮島」は制度ととらえられるかどうかについては疑義を提示した(野地 二〇一一)。私は、村の共有地の個別的な利用の規則がそのような制度として見えたのではないかと推測する。共有地の個別的利用が衰退すると、ミカン栽培のような独占的な利用の形が生ずるのである。

制度としての「困窮島」であるかどうかは別として、由利島の開拓はあらかじめ帰還することを前提とした一時的、季節的、暫定的な移動によりおこなわれていたととらえることができる。このような一時的、季節的、暫定的な移動労働は出稼ぎである。つまり、定住化を前提として移住ではない。由利島は「移住開拓島」ではなく、いわば「出稼ぎ開拓島」である。

由利島への出稼ぎが定住化しなかったのは、村の共有地としての島、出作りの島から抜け出せないうちに、無人島化したと予想する。



写真5 由利島における出稼漁中の住居 [1950年代後半] (宮本 1986 : 273)

これに対して、この出作りの状態の「出稼ぎ開拓島」の段階から定住化したのが、(一)の股島なのであろう。しかし結局、股島は無入島化してしまっただけども。

(6) 地無垢島 (大分県津久見市)

【資料8】(津久見市 一九八五)

〔概略〕 無垢島は地無垢島と沖無垢島からなり、現在、沖無垢島は無入島となっている。

一八七三年、岡山県の阿賀崎村の戸川七郎が無垢島の払い下げを受けて一五ヘクタールの開墾の計画を立てているが、実施されたかどうかは不明。

一八八一年に無垢島に四戸、九人が居住した。先祖は山脇重助という人といわれ、その墓もあるという。しかし、移住のいきさつは不明で、関係者も島には住んでいない。また、愛媛県の三崎の人が最初に無垢島に住んだともいわれている。一九八五年現在、地無垢島に住んでいる人は保戸島、白杵、津久見、佐賀関との関係者が多い。無垢島保戸島との関係が深く、寺は保戸島の海徳寺、法照寺の檀家となっている。人口は一九八〇年、一一一人、世帯数四一。一八八一年以降、人口は漸増している。

〔入会漁場〕 無地島周辺は、江戸時代以来、津久見、白杵、佐賀関など二か村の入会漁場である。一九八五年現在も、無垢島の地先の漁業権は佐賀関町、白杵市および保戸島の各漁業協

同組合の入会を拒んではならないとされ、無垢島の漁業権は厳しく制限されている。

〔飲料水〕 島には三つの共同井戸がある。二つの井戸は塩分が多い。もう一つの井戸は真水で飲料水に利用されている。一九七七年度から給水船が就航した。給水船は市営船無垢島丸が客船と兼用している。一九六六年に自家発電、一九七四年に海底送電。

〔土地〕 島は津久見市大字長目二六四八番地と記されており、島全体が同一の住所で、津久見市の所有である。市に地代を払っている。島民の私有地はない。

三、移住化と無人島化

— 無人島化した移住開拓島の調査計画案

定住化に成功した移住開拓島に注目して、定住過程で構築された漁業活動が作り出す周辺地域との関係(海域ネットワーク)について調査してきた過程で、瀬戸内海域においていくつかの移住開拓島が確認され、その多くが無入島化していることがわかった。

そこで、定住化に成功し持続している事例だけを対象とするだけでなく、定住化に失敗し無人島化した移住開拓島の事例にも注目して、その定住生活が途絶していった過程を対比的にとらえて定住化に成功した事例と比較研究することにより、移住

社会の定住過程や移住社会の特徴を、より一般化した形でとらえることができるという考え（調査課題）が浮上した。

これまでの調査研究の延長ではあるが、大きく異なり発展させるべき研究視点は次の2点である。

・無人島化した移住開拓島を対象として、その定住生活の途絶過程に注目する。無人島化とは定住化の対立語であり、移住開拓島における定住生活の途絶のことを指している。過疎化とは異なる。

・移住後に構築される生活を、漁業活動だけでなく生活体系として全体的にとらえる。生活体系とは、生活維持のために営まれる経済的・非経済的活動の総体のことである。

そして、移住開拓島を定住化・無人島化と対比させ、移住後に構築される生活を持続する生活体系・途絶する生活体系と対比させてとらえる。

無人島化した移住開拓島の調査計画の具体的な案は次のとおりである。調査先は、移住開拓島のX島とその周辺地域である。

〔1〕X島の近代移住開拓史

X島の移住開拓生活変遷史を、移住後の定住生活の形成と途絶過程について、X島移住を経験した人や見聞した人たちの聞き取り・参与観察調査と文献資料調査から明らかにする。

〔2〕生業活動におけるX島と周辺地域との関係

(i) X島を中心にみた周辺地域との関係…X島の定住生活について、人（労働力、家族）とモノ（食料、生産物、道具類など）を通じた周辺地域とのつながりという観点から聞き取り・参与観察と文献資料による調査をおこなう、X島側から周辺地域との関係の形成と変容を明らかにする。

(ii) 周辺地域を中心にみたX島との関係…X島の周辺地域において、食料、生産物、生活物資などの流通と販売を通じたX島とのつながりという観点から聞き取り・参与観察と文献資料による調査をおこない、周辺地域側からX島との関係の形成と変容を明らかにする。

〔3〕無人島化したX島と定住化に成功した移住開拓島との対比的把握

〔1〕と〔2〕で得られた資料をふまえて、定住化に成功した移住開拓島と無人島化したX島を対比的にとらえて、移住社会における定住生活の持続・途絶過程を比較研究することにより、移住後に構築される持続可能な生活体系と特徴を明らかにする。

この調査計画案の特色は、移住社会に構築される持続可能な生活体系を析出するために、とくに定住化に失敗し無人島化した移住開拓島の事例に注目して、定住化に成功した事例と対比してとらえて比較研究しようとする点にある。しかし、それは

単に失敗した事例に学ぶというだけでない。

移住社会は人やモノの移入と移出の流動性によって特徴づけられている。その流動性は移住社会を維持・成立させている特徴であると同時に、無人島化を引き起こす特徴でもある。この流動性は移住社会の定住生活を持続化させもし無人島化させもする諸刃の剣の関係にある。

定住生活が途絶していった無人島化の過程をとらえて、定住化に成功した事例と比較研究することにより、移住社会を支える流動性の仕組みをより一般化した形でとらえることができる。と考える。

【参考文献】

- アチック・ミュージアム(編) 一九七三 「瀬戸内海島嶼巡訪日記」日本常民文化研究所編「日本常民生活資料叢書 二一」三一書房
- 伊吹島民俗資料館運営委員会(編) 二〇〇四 「股島の今昔」『伊吹島民俗資料館だより』平成二六年一〇月 伊吹島民俗資料館
- 沖美町郷土史編集委員会(編) 一九八九 「沖美町―島の生活旧記帳―」沖美町教育委員会
- 河岡武春 一九七三 「中国・四国篇(二) 解説」日本常民文化研究所編「日本常民生活資料叢書 二二」三一書房

観音寺市誌増補改訂版編集委員会(編) 一九八六 「観音寺市誌通史編」観音寺市

武田明 一九九一 「伊吹島の民俗」香川民俗学会

津久見市(編) 一九八五 「津久見市誌」津久見市誌編さん

刊行委員会

野地恒有 二〇一一 「移住開拓島の民俗学ノート(一)」『日本文化論叢』一九 愛知教育大学 日本文化研究室

宮本常一 一九八六 「私の日本地図 瀬戸内海I 広島湾付近」

同友館

柳田国男 一九九〇a 「記念の言葉」『野草雑記』柳田国男全集二四(ちくま文庫) 筑摩書房

柳田国男 一九九〇b 「猫の島」『柳田国男全集二四(ちくま文庫)』筑摩書房

本稿は、平成二二年度、平成二四年度科学研究費(基盤研究(C))「瀬戸内諸島の移住開拓島における定住化と海域ネットワーク形成に関する民俗学的研究」(課題番号二二五二〇八二一五)の年次報告(一部)である。

ま文庫」 筑摩書房